

『御堂関白記』の原因・理由を示す表現

清水 教子

Noriko Shimizu

は じ め に

平安時代中期の公卿の日記、藤原道長（康保3年～万寿4年、966～1027）の『御堂関白記』には原因・理由を示す表現として、どんなものが用いられているのか。これを明らかにするのが本稿の目的である。調査には、岩波書店刊行『大日本古記録』所収の『御堂関白記』上中下3冊を用いた。ただし底本が自筆本・古写本の部分に限り、平松本の部分は対象から外した。『御堂関白記』（以下、本文献と呼ぶことにする。）は、長徳4年（998）から治安元年（1021）まで、道長が33歳から56歳のときまでの日記である。具体例を引用するに当たっては、縦書きを横書きに、旧字体はできるだけ新字体に、それぞれ改めた。又、踊り字「く」はそれ相当の文字に置き換えた。たとえば、長保元年3月24日の記事「少納言統理来云 廿七日上多武峯可出家 是本意云く 召前賜木蓮子念数」は、「少納言統理来云 廿七日上多武峰可出家 是本意云云 召前賜木蓮子念数」（長保元年3月24日 上19ページ）のように記す。

本文献の原因・理由を示す表現は、次のように大別できる。

A 原因・理由を示す文字が表記されている場合

- a 仍（接続詞よつて）が用いられている場合 — 「 α 。仍 β 。」
- b 故（接続詞ゆゑに）が用いられている場合 — 「 α 。故 β 。」
- c 依（により）が用いられている場合 — 「依 α 、 β 。」
- d 原因・理由の説明が後になっている場合 — 「 β 。是依 α 也。」

B 原因・理由を示す文字は表記されていないが、文意上そうであると判断できる場合（Aのa, c, dに相当する場合）

以下、項目ごとに述べていく。そして、仍（よつて）と依（により）との関係についても推測してみたい。

一 接続詞仍（よつて）が用いられている場合

接続詞よつては、接続詞よりてが促音便化したものであり、前の事柄が原因・理由になって、後の事柄が起こることを示すものである。和文における初出例は、小学館刊行の『日本国語大辞典』によれば、よりてが『千載集』に、よつてが『高野本平家物語』に、それぞれあることが記されている。『千載集』は文治3年（1187）の撰進であり、『平家物語』の原形は承久～仁治（1219～1243）の頃に成るかとされている。

本文献の仍が接続詞よつてであると判断したのは、具体例の検討と、天養～治承（1144～1181）の頃に成立した書記言語生活上の国語辞書『三卷本色葉字類抄』の訓とによる。なお、よつては漢文の訓

読から生じた語であり、本来の和語ではない。

依^ヨテ因藉仍縁 （前田本色葉字類抄 辞字 上116オ6）

仍（よつて）は全部で426例あり、その内88例は文頭に立つことがはっきりしている。たとえば、「仁和寺故大僧正法事也 仍送僧前」（長保元年6月3日 上22ページ）のように、指定の助動詞也（なり）が直前にあるもの35例、「摂政被来云 今夜斎院盗人入云云 仍奉遣奉云云」（寛仁元年7月2日 下109ページ）のように、云云（うんぬん）が直前にあるもの30例、「午時許人来云 有其気色者 仍行向」（寛仁2年12月9日 下189ページ）のように、直前に者（てへり）のあるもの21例、「只今所不覚也 若付曆歟 仍引見已無件事」（寛仁3年正月5日 下191ページ）のように、終助詞歟（か）が直前にあるもの1例、「春宮亮周頼帶刀試文持来 仰云 勅使可持来と 仍即返給」（長和5年3月24日 下54ページ）のように、引用の格助詞とが直前にあるもの1例から明らかである。残り338例は、「大歌別当右衛門督不候 仍以中宮権大夫為代」（寛弘元年11月18日 上118ページ）のように、前後の文脈から接続詞仍（よつて）であると判断できるものである。構文は、「 α 。仍 β 。」である。

接続詞仍（よつて）で結ばれる前の事柄と後の事柄の内容は多方面にわたるが、比較的多く用いられている例をいくつか示しておく。病気に關したもの35例、火事に關したもの11例、出産に關したもの7例、物忌に關したもの7例、死の穢れに關したもの7例、障りに關したもの5例、触穢に關したもの4例、といった具合である。次に、いくつかの具体例を挙げる。

- 1（病氣） 三日夕方 舌下有小物 召重雅令見 申重舌 仍加療治（寛弘元年5月15日 上88ページ）
- 2（火事） 隨身公時来 申云 法興院焼亡云云 仍求乗物馳至（寛弘8年10月6日 中121ページ）
- 3（出産） 問經宮雜事次 右衛門督妾有産氣云云 仍問遣（長和5年10月4日 下77ページ）
- 4（物忌） 大宮御方御物忌也 仍不參（寛仁元年10月2日 下121ページ）
- 5（死の穢れ） 摂政參中宮御方 還来示云 彼御方有犬死穢者 仍不參大内 行土御門云云（寛仁元年6月28日 下108ページ）
- 6（触穢） 御楔前駟右兵衛佐通範申触穢由 仍改定同府佐經定（長和5年4月15日 下58ページ）
- 7（障り） 右大臣・内大臣申障由不參 仍召右大将被行宣命（長和元年4月27日 中151ページ）

なお、接続詞よつてと判断できる例は、依1例、因1例がある。8（依） 右大将示無牛田 依送牛（寛弘6年12月23日 中35ページ） 9（因） 御論議如常 有七番 而遍救依申障被免 又不入經救 依出憐 因件入經救 經救・寛印尤美也（寛弘元年3月29日 上81ページ）

二 接続詞故（ゆゑに）が用いられている場合

接続詞故（ゆゑに）は、接続詞仍（よつて）と同じく、先行の事柄が原因・理由になって、後続の事柄が起ることを示すものである。『日本国語大辞典』によれば、初出例は『法華義疏長保四年点』（1002年）となっている。やはり、漢文の訓読から生じた語である。

故^コ古^コ兼^ヘ反^ヘ由^ユ以致^ニ已^ニ上^ニ同 （前田本色葉字類抄 辞字 下68オ4）

仍（よつて）が426例もあるのに対し、故（ゆゑに）は次の1例のみである。10 右衛門督示云中宮參大原野給事如何 或者夢想有告云云 而今年有旱魃事 仍於參給大事也 故停給也 令占筮可一定者（寛弘元年8月22日 上104ページ） 直前の一文に仍が用いられているので、同じ意味を表す別

の語故で置き換えたものか、とも考えられる。

三 依(により)が用いられている場合

本文献の依が原因・理由を示す表現として用いられていると判断できるのは、個々の具体例の前後の文脈によってである。よりどころとなる事柄に基づく、という意味の動詞よるが「によりて」「によって」というように接続助詞的に用いられた初出例は、『日本国語大辞典』によれば虎寛本狂言・宗論である。「出家の役じゃに依て行ねば成らぬ。」の例である。本文献の場合は、確証はないが、接続助詞での付かない形であったのではないかと思う。

依ヨリ因藉寄仍

(前田本色葉字類抄 辞字 上116オ7)

依(により)は、全部で687例用いられている。構文は「依 α 、 β 。」の形である。意味は、 α なので β であると基本的に考えてよい。 α に注目すると、和語・字音語を含めて、名詞相当語の場合が345例(その内形式名詞は29例)、形容詞・形容動詞・副詞に相当する語の場合が118例、動詞(助動詞が付いているものもある)に相当する語の場合が224例ある。 α の内容は多彩であるが、比較的多く用いられているものを示せば、次のようになる。名詞相当語では、物忌(ものいみ)119例、事(形式名詞こと)27例、触穢(シヨクエ)15例、雨(あめ)14例、之(代名詞これ)10例(内1例は是)、消息(セウソク)4例、服(ブク)4例、軽服(キヤウブク)4例、穢(けがれ)4例、病(やまひ)3例、方忌(かたいみ)3例、忌日(いみび)3例、暇(いとま)3例、旱損(カンソン)3例、吉方(えホウ)3例などがある。召(めし)31例、仰(おほせ)23例、命(メイ)3例などは、原因・理由を示すというよりは、「～に従い」と現代語訳にする方がふさわしいものである。形容詞は、重(おもし)23例、固(かたし)9例、軽(かるし)8例があるが、三者共にその内容は物忌に関したものが多。その外、無(なし)16例、無便(ピンなし)5例、近(ちかし)4例などがある。動詞は、有(あり)31例、候(さぶらふ)10例、申(まうす)9例、参(まゐる)8例、御(おはす)5例などである。有(あり)の内容は、方忌10例、触穢5例、穢3例、所慎(つつしむところ)3例などである。次に、いくつかの具体例を挙げる。

< 名 詞 相 当 語 >

11 此夜可有中院行幸 而依雨停止(長和2年12月11日 中255ページ) 12 依軽服無音楽(寛弘元年3月13日 上77ページ) 13 可供奉御襖内侍順子 依暇改仰能子者(長和元年閏10月2日 中173ページ) 14 日来依触穢不参内 而依召参入(寛弘7年8月10日 中72ページ) 15 依宮仰懷信登山(寛仁2年8月26日 下173ページ) 16 候御前間 被仰云 尚有勞御事 依之行大赦者(長和4年5月23日 下11ページ) 17 上女方参中宮御方 為女方致無礼云云 依是上女方等被追放者 又同女方候宮御方者除籍(寛弘8年5月11日 中105ページ) 18 依舍利会事 僧等遅来(寛弘2年4月24日 上142ページ)

< 形 容 詞 相 当 語 > (α の中心)

19 依物忌輕 出東河解除(寛弘7年3月2日 中51ページ) 20 右府為加階賀被立頼 依無案内無其用意 21 此日家所充 依政所無便 於侍所定之(長和4年8月2日 下21ページ) 22 子時許西方有火 驚欲参大内 依枇杷殿近参入(寛弘8年11月4日 中124ページ)

< 形 容 動 詞 相 当 語 > (α の中心)

23 依月光^{トウトウ}立篝火 入夜月明令取退（長和2年8月13日 中239ページ） 24 入夜依熱氣盛
乘舟追涼（長和4年閏6月18日 下16ページ） 25 雖有惱事尚微微 從午時及戌時 依微還来（寛仁
2年12月8日 下188ページ） 26 依不障分明 兼綱・顯定・親方等候恐（長和5年7月20日 下69ペ
ージ） 23は^{トウトウ}（トウトウたり），24は盛（さかなり），25は微（かすかなり），26は分明（フン
ミヤウなり）である。形容詞106例に対し，形容動詞は全11例である。

＜ 副 詞 相 当 語 ＞

27 祭使忠經許舞人下重送 件使道理可奉仕伊成也 而依触^モ暇文 被充忠經 事依忽申代官 右兵
衛佐通範奉仕（寛弘6年11月8日 中27ページ） 副詞はこの例1例だけで，忽（たちまち）である。

＜ 動 詞 相 当 語 ＞

28 心地不^ズ宜内 依有方忌退出（長和5年4月15日 下57ページ） 29 依不候内舍人 御弓奏付内
侍（寛弘元年正月7日 上65ページ） 30 親王照登依申障 以左近中将教通為代（寛弘8年10月11日
中122ページ） 31 依舞人遲参 日晚事初（寛仁2年11月25日 下187ページ） 32 卅講五卷日也
依東宮御 無持回事 只置小廊（長和4年5月13日 下11ページ） 33 明教令奏大内云 依奉仕公家
御祈 左大臣不^ズ宜思侍（長和4年6月14日 下13ページ） 34 而豐後守孝理相会 申云 依府使責難
堪参上 而未申事由於殿下云云（長和2年11月18日 中252ページ） 33は奉仕（ハウシす），34は難
堪（たへがたし）の例である。

なお，因（により）が用いられているのは，次の2例のみである。いずれも α は，指示代名詞これ
（之・茲）である。35 月虧初 十五分十三許虧（中略）若虧重恐思不少 因之不参大内（寛弘元年11
月15日 上118ページ） 36 明教令奏大内云 依奉仕公家御祈 左大臣不^ズ宜思侍 因茲世間乃無用
此御目御修法不奉仕思給云云（長和4年6月14日 下13ページ）

四 原因・理由の説明が後になっている場合

上記三の依（により）が用いられている場合は，「依 α ， β 。」の構文であるが，今度は「 β 。是依
 α 也。」「 β 。依 α 也。」の構文を代表とする場合である。全222例の内，前文の内容を受ける指示代
名詞是（これ — 是^{是紙反} 前田本色葉字類抄 辞字 下8ウ2）を伴うもの129例，是を伴わないもの
93例である。構文の型を更に下位分類すれば，「 β 。是依 α 也。」が100例，「 β 。是依 α 。」が13例，
「 β 。是依 α 歟。」が11例，「 β 。是依 α 云云。」が4例，「 β 。是依 α 者。」が1例，「 β 。依 α 也。」
が69例，「 β 。依 α 。」が13例，「 β 。依 α 歟。」が6例，「 β 。依 α 云云。」が3例，「 β 。依 α 者。」
が2例となる。又， α の中心になる言葉に注目すると，名詞相当語が82例，動詞相当語が112例，形容
詞・形容動詞・副詞相当語が28例となる。 α ・ β の内容は多様である。以下に，具体例を示す。

＜ 指示代名詞是がある場合 ＞

37 上卿皆参 只^只中納言一人不参 是依忌日也（長和元年5月17日 中155ページ） 38 以頼任
奉問禅林寺僧都 是依惱給腫物也（長和元年12月13日 中187ページ） 39 又被仰云 東宮徙去正月未
梳頭云云 是依無理髮人也（長和5年3月2日 下49ページ） 40 入夜参内 是依有方忌（寛弘7年12
月21日 中85ページ） 41 昨今日間桜花猶盛開 年来之間無及四月時 若是二月間寒氣盛 依氷雪烈
歟（寛仁2年4月1日 下152ページ） 42 此二月三月間牛馬多以斃 京并外国如此云云 是又依天
寒云云（寛仁2年4月1日 下152ページ） 43 参院 被仰云 日来如聞雖任帶刀未帶刀 無食云云

是依不奏案内者（長和5年3月2日 下49ページ） 上記7例の α の中心となる語は、37忌日（いみび）、38惱給（なやみたまふ）、39無（なし）、40有（あり）、41盛（さかんなり）・烈（はげし）、42寒（さむし）、43不奏（ソウせず）である。依の代わりに仍（よる）が用いられているのは、次の1例である。44 事了乱声各一度 失歟 可有三度也 各三曲 是入夜仍也（寛弘7年7月28日 中71ページ）傍線部分は、「これよるに在るによるなり」と仮に読んでおく。

なお、依（よる）は用いられていないが、名詞所以（ゆゑん）の用いられた例が一つある。45 即示送云 （中略） 又所申陳頗有奇事 申仲遠有怠 非可為氏長 是奇思給所以者（長和元年閏10月14日 中175ページ）

＜ 指示代名詞是（これ）が無い場合 ＞

46 列見 無宴座・穩座 依諒闇也（長和元年8月11日 中163ページ） 47 法隆寺觀峰是重任 此度加四任 每任依有功也（長和5年5月16日 下61ページ） 48 奉渡法興院東葉師堂御仏 仏壇等未造了 然而奉居所依無便也（長和4年閏6月24日 下17ページ） 49 乗舟參皇太后宮御方 依不能行歩（長和4年7月25日 下20ページ） 50 松前為解除行間 於川原雷電数度 太大也 仍還来 以為時宿稱為使 件処先年到間又如此 依用赤平張等歟（寛弘8年2月23日 中94ページ） 51 摂政參大内 未着服 依日次宜也云云（寛仁3年9月14日 下205ページ） 52 以資平朝臣令仰停止相撲由 仰云 依土御門焼亡并故一条左大臣室家悩者（長和5年7月24日 下69ページ） 上記7例の α の中心となる語は、46諒闇（リヤウアン）、47有功（コウあり）、48無便（ビンなし）、49不能行歩（ギヤウブにあたはず）、50用（もちふ）、51宜（よろし）、52焼亡（ゼウマウ）・悩（なやみ）である。

五 原因・理由を示す文字は表記されていないが、文脈上から原因・理由を示す表現であると判断できる場合

上記一から四に述べている外に、原因・理由を示す文字が用いられている表現は、接続助詞「て」によるものと、接続助詞のように用いられた名詞間（あひだ）によるものとの二種類がある。接続助詞「て」は、次の二つの記事に見られる。一つは、一条天皇が病気のため東宮居貞親王に譲位することを語る場面で、東宮から天皇への返事の中に用いられている。53 即參啓此由 御返事云 暫も可候侍りつるを 承御心地非例由^天 久候^む有憚^天 早能^{なり} 有仰親王事は 無仰とも可奉仕事 恐申由可奏者（寛弘8年6月2日 中108ページ）小書きされた二つの天（て）により、原因・理由が示されている。他の一つは、54 摂政詣慈徳寺 自心地悩而不參（寛仁2年12月19日 下189ページ）である。摂政頼通は慈徳寺に参ったが、道長のほうは病気で気分が悪くて参らなかった、という場面である。形容詞悩（なやまし）に接続する助詞而（て）により、原因・理由が示されている。他方、間（あひだ）は次の一例である。55 風病発動遅参間 亮通任朝臣来 早可参由示 即参入（寛弘4年12月26日 上245ページ）

ところで、ここに取り上げるのは、先述の仍（よつて）や依（により）が表記上用いられていないものである。文脈上から、仍があるものと解されるもの9例、依があるものと解されるもの13例、原因・理由の説明が後にあるものと解されるもの3例である。

まず、仍に関しては次の3例を挙げておく。56 近衛御門日来有悩事 行見之（寛弘6年7月19日 中10ページ） — cf. 近衛御門女子悩 仍渡見之（寛弘6年9月4日 中18ページ） 57 從院入走

来 御惱重由告来 乍驚馳参 御惱重御座（寛弘8年6月20日 中111ページ） — cf. 亥時許火見西方 在大内方 仍乍驚馳参 可然上達部・殿上人多参会（寛仁3年3月12日 下198ページ） 58 欲参内間 隨身所下只今申有犬産由 令立簡（寛弘6年9月27日 中21ページ） — cf. 今日東渡殿下犬死 仍令門門立簡（長和2年9月3日 中242ページ）

依に関しては、次の5例を挙げておく。59 物忌重籠居（寛弘7年7月13日 中69ページ） — cf. 依物忌重籠居（寛弘元年閏9月9日 上110ページ） 60 有慎事 不他行（寛弘9年7月20日 中161ページ） — cf. 依有慎事無他行（長和元年2月22日 中140ページ） 61 有所勞不参（長和4年閏6月29日 下17ページ） — cf. 依有所勞不参（寛弘7年10月4日 中77ページ） 62 日来有惱事 不参内（寛弘2年3月4日 上136ページ） — cf. 從内有召 而依有惱事不参（長和4年6月4日 下12ページ） 63 奉仕官奏 此間心神不宜退出 前後不覚惱（長保元年6月20日 上22ページ） — cf. 依心神不宜 不参法興院（寛仁2年7月6日 下169ページ） これら5例は、接続助詞でが表記されていない例であると考えてよい。

原因・理由の説明が後にあると解されるものは、次の3例である。64 仰云 来月十三日一親王元服事延行之者 是中宮御産期若会合可無便者（寛弘6年9月24日 中21ページ） 65 令召舟 無舟 是大納言召用也（長和2年10月3日 中246ページ） 66 左大弁経頼妻亡 是産事也（長和5年7月29日 下70ページ） これら3例は、いずれも前文の内容を指示代名詞是で受けて、原因・理由を説明している。「β。是依α也。」の構文の依が欠けている例であると考えてよい。

六 仍（よつて）と依（により）との関係

仍は「α。仍β。」，依は「依α，β。」の構文であるから，前者は二文，後者は一文である。しかし，内容上は両者ともに原因・理由を示している点で共通している。道長はどんな観点から，両者を使い分けているのであろうか。その点を推測してみたい。

その一つの手掛かりとして，αの内容が両者に共通しているものを取り出し比較してみる。仍426例・依687例の内αの内容が共通しているのは，病気（仍35例・依52例），物忌（仍7例・依119例），火事（仍11例・依7例），触穢（仍4例・依15例），穢（仍7例・依6例），服（ブク）（仍1例・依8例），夢想（仍1例・依7例），忌（仍2例・依5例），障（仍5例・依2例），不浄（仍1例・依3例）の10項目が主なものである。これら仍74例・依224例の内，内容が大体一致しているのは，病気3例・物忌1例・触穢1例・穢れ1例・夢想1例で，併せて7例しか見当たらない。次に，その具体例を挙げる。

67 日来風病発 今日宜 仍参大内（寛弘7年8月3日 中71ページ） — 日来風病発動 今日依宜参大内并中宮（寛仁2年正月30日 下139ページ） 68 頭風尚難堪 仍無他行（長和元年8月14日 下164ページ） — 一兩日依難堪 不他行（長和元年11月28日 中185ページ） 69 御風発給 是日来依召氷也 然無御殊事 仍退出（寛仁2年4月20日 下155ページ） — 從昨夜有咳病氣 然而依殊事不御座御出（長保元年3月16日 上19ページ） 70 昨日今日物忌也 仍不他行（長和4年正月4日 下2ページ） — 昨日今日依物忌不他行（長和元年2月19日 中140ページ） 71 臨時祭使頼光朝臣申触穢由 仍申奉仕公信朝臣由（長和元年12月17日 中188ページ） — 春日使朝臣依申触穢由 右少將經親有仰可奉仕由（寛弘8年2月10日 中92ページ） 72 摂政参中宮御方 還来示云 彼御方有犬

死穢者 仍不参大内 行土御門云云（寛仁元年6月28日 下108ページ） — 從昨日一条依犬死穢 出候内（寛仁元年8月12日 下113ページ） 73 夢想不静 仍令修御諷誦（長和5年10月12日 下78ページ） — 夢想^レ依不静 令諷誦（寛仁元年3月25日 下97ページ）

先ず、上記7例の字数（ $\alpha \cdot \beta$, $r = \alpha + \beta$ ）を調べてみよう。左記の一覧表から、 $\alpha \cdot \beta \cdot r$ とも

用例番号		67	68	69	70	71	72	73	合計	平均
仍	α	3	5	5	7	12	12	4	48	6.9
	β	3	3	2	3	8	10	5	34	4.9
	r	6	8	7	10	20	22	9	82	11.7
依	α	1	5	5	6	9	8	4	38	5.4
	β	5	2	2	3	11	3	3	29	4.1
	r	6	7	7	9	20	11	7	67	9.6

に、仍構文のほうが依構文よりも平均字数が少しだけ多いことがわかる。内容の大体同じものを選んだので、両構文の平均字数の差は小さい。しかし、先述の10項目（仍74例・依224例）について同様の調査をすると、平均字数は、仍構文が α 8.8・ β 4.8・ r 13.6、依構文が α 4.6・ β 4.3・ r 8.9 となる。すなわち、仍構文のほう

が α で1.9倍、 r で1.5倍となって両者の差が開いてくる。つまり、字数の点では、仍構文のほうが依構文よりも多く用いられていると言える。

次に、構文の内部構造に注目する。用例70番のように指定の助動詞也（なり）が使われたり、72番の「示云～者」という会話文の引用形式が使われたりすると、そこで文が完結するので、字数の多少にかかわらず接続詞仍を用いざるを得ないということである。又、70番や73番の例から、仍構文と依構文はお互いに入れ換えることができると言える。ただし、 $\alpha \cdot \beta$ ともに字数が少ないときに限られる。

一応の結論として、道長は α の字数が多いときに仍構文を用い、 α の字数が極端に少ないとき（たとえば2字の名詞）は依構文を用いていると言える。又、字数に関係なく、文末を示す字（也・云云・者・歟など）を使えば必然的に仍構文を用いざるを得ないと言える。

七 ま と め

本文の原因・理由を示す表現は、原因・理由を示す文字が表記されているかないかによって、先ず二つに大別される。前者は、接続詞仍（よつて）・故（ゆゑに）が用いられている場合、依（により）が用いられている場合、原因・理由の説明が後になっている場合 — 依（による）、の三つに更に大別される。その外、少数例ではあるが、接続助詞ての用いられる場合がある。ただし、この「て」は和文体に普通に見られるものであって、本文のような記録体のもものでは例外であると言える。用例数の点から見れば、「依 α , β 。」構文が最も多く687例、次いで「 α 。仍 β 。」構文が426例、「 β 。是依 α 也。」に代表される構文が222例の順になっている。これら三つの型が、本文での代表と考えられる。なお、「 β 。是依 α 也。」構文は、前文 β の内容を受ける指示代名詞是（これ）が用いられている場合が129例、用いられていない場合が93例ある。いずれも指定の助動詞也（なり）が使われている場合が最も多く、「 β 。是依 α 也。」構文100例、「 β 。依 α 也。」構文69例となっていて、他の場合を大きく引き離している（次ページの一覧表を参照）。

後者（原因・理由を示す文字が表記されていない場合）は25例ある。構文別に見れば、「 α 。（仍） β 。」が9例、「（依） α , β 。」が13例、「 β 。是（依） α 也。」が3例となる。これらをどのように解釈するかが問題であるが、上記五で先述したように、前二つの構文については接続助詞ての無表記であると考えておく。

最後に、「 α 。仍 β 。」構文と「依 α ， β 。」構文の関係についてまとめておく。両者の共通点は言うまでもないが、原因・理由を示す表現であるということである。相違点は、構文上から仍構文は二文であり、依構文は一文であるということである。 α に注目すれば、依構文は「依物忌籠居」（長和4年10月20日 下28ページ）に見られるように、漢字2字の名詞物忌（ものいみ）の例が119例もあるのに代表されるように、 α が名詞の例が345例と多い。つまり、 α の字数が少ないのである。これに対し、仍構文は原則として α の字数が多い。一文が長いのである。ただし、上記六で先述したように、文末を示す文字（也・云云・者・歟など 一 下の一覧表を参照）が用いられていると、 α の字数に関係なく仍構文を取らざるを得ないということである。

『御堂関白記』の原因・理由を示す表現一覧表

項 目		文字	用 例 数				構 文		
一	接 続 詞 よ っ て	仍	429	428	426	cf. α 也。仍 β 。 35例 α 云云。仍 β 。 30例 α 者。仍 β 。 21例 α 歟。仍 β 。 1例 α と。仍 β 。 1例		α 。仍 β 。	
		依			1	α 。依 β 。			
		因			1	α 。因 β 。			
二	ゆゑに	故		1			α 。故 β 。		
三	(に) より	依	689	687	345	*名 詞		依 α ， β 。	
					224	*動 詞			
					118	*形容詞	106		
						*形容動詞	11		
	(に) より	因	2		*副 詞	1			
						*名 詞	2	因 α ， β 。	
四	原因・理由の 説明が後にな っている場合	依	223	222	129	是の表記さ れている場 合	100	β 。是依 α 也。	
							13	β 。是依 α 。	
							11	β 。是依 α 歟。	
							4	β 。是依 α 云云。	
							1	β 。是依 α 者。	
	(に) よる	依	223	222	93	これ 是の表記さ れていない 場合	69	β 。依 α 也。	
							13	β 。依 α 。	
							6	β 。依 α 歟。	
							3	β 。依 α 云云。	
							2	β 。依 α 者。	
	(に) よる 名詞 ゆゑん	仍		1		是のある場合		β 。是仍 α 也。	
		所以	1					β 。是 α 所以者。	
五	接 続 助 詞 て	天	3	2				α 天 β 。	
		而		1				α 而 β 。	
	原因・理由を 示す文字が表 記されていない場合	(仍)	25	22	9				α 。(仍) β 。
		(依)			13				(依) α ， β 。
		※		3					β 。是(依) α 也。
			1,370	*印 α ，又は α の中心になる言葉を示す。					

*印 α ，又は α の中心になる言葉を示す。

※印 原因・理由の説明が後になっている場合。